

# 書評『中国のメディア・表象とジェンダー』

中国女性史研究会編  
中国のメディア・表象とジェンダー

森 紀子



A5判 324頁  
研文出版  
[本体4500円+税]

本書は中国近世から現代にいたる演劇、小説、画報などのメディアの中に表象されるジェンダーについて論じたものであり、九編の論文から構成されている。それぞれが独立した一編であるため、まずは各々に即して評していきたい。

1. 大島立子氏の「元雑劇に見る家族像」では、雑劇の内容として出家願望や妻への未練、家族における妻の重要性、兄弟の尊重、孝の強調などの家族観が表現され、妻妾の権限や必ずしも男系にこだわらない家系の継承、財産相続の在り方など、当時の家族の実態が反映されているという。一方、礼教的家族規範や理念も多く語られ、その伝達や教化も担っていたとされる。

ところで、評者が最も興味をそそられたのは、道士が出家

の決意を示すために子殺しをする演出である。氏はそれを子供の私物化と解されているが、それ以上に中国伝統社会において、出家とは何よりも繋ぐべき自らの宗族、子孫を断ち切るものとして定義化され、その象徴的表現が子殺しだったのではなからうか。雑劇におけるパターン化された演出としても考察されることを期待したい。

2. 五味知子氏の「纏足・大脚・赤脚」は小説や清末の瓦版等から明清時代の婢の存在を分析したものであるが、その視点を「足」においた点に特徴がある。周知のように漢族では身分にかかわらず纏足が美の基準とされていた。本論は婢の存在に絞ってそれを再確認したものである。婢は奴僕(男性)とともに売買の対象となる無期的家内労働力であるが、主人

の妾として認められ、賤の身分から脱出しうる可能性があることから、その身分流動性は奴僕より高いとされる。しかし、それには縛足であることが必須であり、異性を引き付ける美しさに欠けた大脚や赤脚であったならば論外となる。婢の仕事内容、主人の愛顧などもその足の形態によって差別化されるといふ。婢を一律の存在とせず、その差異性を足の描写から読み解いた丁寧な作業である。

3. 前山加奈子氏の「『圖画日報』に見る清末上海の働く女性たち」は、清末上海で刊行された『圖画日報』の「生業の写生」欄から、女性の様々な職種を具体的に摘出したものである。日報にとりあげられた女性の最多数は妓女であるが、氏はそれ以外の職種に注目する。物づくり、物売り、雑業と大きく分類したうえで、生糸女工、茶葉選り、靴下底布切り等々の細々した職種や、新商売としての国産機械製手ぬぐい売り、さらにはひきつけ治し婆さん、三姑六婆などの伝統的な職種まで、その提示例は実に多岐にわたる。そのため職種の羅列に傾くきらいもないわけではないが、時代の転換期における新旧の対比を表出するなどの工夫もあり、おもちゃ箱をひっくり返したような面白さを感じられた。

4. 石川照子・須藤瑞代両氏の「近代中国の女子学生」は『良友』画報、『婦女雜誌』、『上海婦女』に見られる女子学生像の変遷を分析したものである。中国における女子学生の出現は一九世紀後半であり、一九二〇～三〇年代前半には新生の「モダンガール」として雑誌を飾るようになる。家族の支援により学生生活を満喫する女子学生たちは若さと健康美の表象であった。とはいえ、出口はほぼ結婚生活に限られ、卒業後の彼女たちの自画像は苦悩と絶望に彩られている。三〇年代後半になると、政治・社会運動に参加する女子学生の姿が報道されはじめ、日中戦争の拡大とともに、女子学生の活動も兵士の慰労、看護活動、農村教育など、救国活動から軍事活動にまで至る。そしてメディアは、仕事も家事・育児も完璧にこなす模範的女性像を提示するようになる。女子学生像の変遷が中国近代史そのものであることがよく伝わる論文である。

5. 江上幸子氏の「近代中国における主体的妓女の表象とその夭折」は一九二〇～三〇年代の上海の妓女を捉えたものである。表題にいう「主体的妓女」とは何を意味するのか。それは、これまで妓女にそそがれていた「侮蔑」「憐憫」の表象を超えた視点、すなわち売春婦を単なる犠牲者ではなく、

男性国家の規制の中で自立する社会的行為者ととらえ、「売春」を「労働」と捉える視点である。丁玲や老舎の小説にその例が見出され、作家の視点もその主体によりそっている。「新奇の売淫」と称され過酷な状況にあるダンサーも「女性知識人」との座談会の中で「労働者」としての矜持を示す。しかし、現在の大陸にはかかる自己表象が育つ環境はまだないと氏は言う。

「主體的妓女」という氏の切り口は十分に刺激的であるが、同時に「主體的」の『美句』の下に、性産業の実態や環境が分析されぬままにジェンダー差別が覆い隠されるとすれば、これはおおいに悩ましい存在といえよう。

6. リンダ・グロブ氏の「華北のある小都市での売春に関する研究」は一九三〇年代の地方都市・高陽における売春実態を現地調査史料から分析したものである。高陽は農村織物業の発達により急速に発展した小都市であるが、繊維業の労働力が男性中心であることや、北京・天津・保定に近く軍隊が往来するなど、売春の成り立つ経済状況はある。大都市天津と比較すると、高陽には娼館街が無く、性産業にかかわる女性のみならず「暗娼（私娼）」である。その大半は大都市から格落ちして流れてきた女性であり、その生業を自律的に細々

と営んでいたという。先行研究が多く上海などの大都市を対象としている中で、特色ある小都市を対象とした点、調査史料に基づき現地の売春業の実態を実証的に描き上げた点は長年にわたる氏の高陽研究の賜物であろう。

7. 松井直之氏の「台湾における戒厳令解除と出版法の廃止」について。

日本敗戦以後の台湾では、国民党支配のもと「日本勢力の排除」を達成するためマスメディアの統制がおこなわれた。「台湾人」と「外省人」の大規模抗争である二・二八事件が勃発するや、台北市には臨時戒厳令が敷かれ「台湾人」の言論出版の自由は奪われていった。出版統制は複数の法体制により厳しく執行されていたが、最終的に行政院新聞局があらゆるメディアを一元管理するようになった。一方、アメリカと中国の外交関係が樹立されるなど、台湾をめぐる国際環境は急激に変化する。それに前後して「戒厳令解除」「報道統制の解除」等を求める大規模なデモが行われ、かような状況の中で多くの女性団体が設立され、女性運動が一層加速されることになった。氏は複雑な台湾の政治状況を、法令を踏まえて丁寧に解説し、その上で女性団体の活動にも言及していく。ただ、大状況のうねりの中で、その活動が前面に出されてい

ないうらみが残る。女性総統が誕生し、同性婚法案の審議もなされるかという台湾の現状がある。女性団体そのものに、焦点をあてた論考を引き続き期待したい。

8. 姚毅氏の「はだしの医者」の視覚表現とジェンダー」は、農村医療に奉仕する半農半医の衛生員を取り上げ、文化大革命期のプロパガンダ的表現と実態の乖離を丁寧に分析したものである。映画やポスターで視覚化された「はだしの医者」は医薬箱、麦わら帽子を必須アイテムとして、葉草採集や鍼灸治療も併用しつつ医療をおこなう健康美にあふれた若い女性として描かれる。実際には男性の医者の方が多かったにもかかわらず女性として描かれるのは、助産を含め女性患者に接する男性治療者への拒否感情が働くからであり、その底流には家父長的規範があるという。ポスター表現においても、工業労働者は男性、農民は女性というジェンダー配分が一般的であった。しかし、現実乖離とはいえ、女性医者の存在がクローズアップされることは「男女平等」の公式と整合性をもち、女性の活動空間を確保することにもつながった、という氏の分析はなかなか説得力がある。

9. 遠山日出也氏「行動派フェミニストの街頭パフォーマンス

スアート」は二〇一二年以降、女子大学生を中心とする中国の「行動派フェミニスト」が各種の社会問題に対して起こした街頭アクションについて分析する。デモや集会などを厳しく規制する体制の下で、わかりやすいパフォーマンスをもって世論に訴える活動であり、必ずしも抗議対象に直結しない繁華街で行われた。マスメディアにより報道されえない活動はネット情報とリンクする形で拡散されたが、性的主体性の主張などの先鋭化した表現には社会の反発も強まった。二〇一五年、バス中での痴漢防止キャンペーンを計画した活動家たちが刑事拘留されたのを機に、人権派への当局の弾圧は厳しくなり、表立った活動は不可能になっていくという。日本でも、経済成長にともなう中国社会の亀裂などはよく報道されているが、当局に抑え込まれているような突出した意識や先鋭的な行動について、知りうる術はほぼ無い。ネット資料を駆使した氏ならではの成果であろう。

以上、九編の論文について簡単な紹介と寸評を試みた。いずれも力作であり、評者の理解の行き届かない点があったとすればお許し願いたい。

いささか私事にわたるが、かつて中国史専攻の初学生であった私は、何の心構えもなく漢籍と対峙することになった。

線装本をひもといても何やら黒い塊が目の前に屹立しているばかりでさっぱりイメージがわかず、もっとビジュアルな楽しい史料はないものかと己の未熟さをたなにあげてひそかに嘆いたものである。

しかし、歳月の経過とともに『清明上河図』や『点石齋画報』、青木正児編『北京風俗圖譜』などが復刻、出版されてきた。文革を乗り越えた中国人研究者の関心もぐっと幅が広くなり、昨今では、様々なジャンルの素材が史料として駆使されている。本書もかような流れの上に生まれえたものと言えよう。

その一方で、本書のようにメディア表現を対象とした場合、抽出される女性像に偏りが生ずることはあらかじめ予想されることであろう。現在でもメディアが追うものは新奇な事象であり、身近にありふれた事象をことさらに取り上げることにはあまりない。文献史料においてさえそうであり、ましてや視覚表現ということであれば、外部に対して露出の許される女性が対象となることは自然な流れであろう。本書でもピックアップされた女性には妓女が多く、語られる営為も売春である。まさにこのような現象こそがジェンダー性を表象しているものといえようか。

また、図象は提示されただけでもかなりの情報を読者に与

えるものではあるが、それを読み解いた上で、その歴史背景にまでせまるためには、やはり補助的な史料の活用が不可欠であろう。いささか無いものねだりではあるが、本書のいくつかのケースでは、図象の読み解きに力を割くことが、結果的に表面を丁寧になでて小さな世界の提示に終わってしまう感が無きにしてもあらずであった。とはいえ、新たな問題意識と方法が開花されつつあることは確実に読み取ることができ、今後の展開が非常に期待されるところである。

なお、最後に秋山洋子氏の「日本における中国女性／ジェンダー史研究」があり、中国女性史研究会の軌跡が紹介されている。ぜひ参照されたい。

(もり・のりこ 神戸大学名誉教授)